

報告 1 : ジョン・エドワーズの無神論批判

—ロック『キリスト教の合理性』批判を念頭に—

武井 敬亮

名誉革命後、プロテスタント信仰に対するカトリックの外的脅威が減退する一方、イングランド国内においては、三位一体論に関して、異端とみなされるプロテスタント諸派が急増した (Nuovo 2012: XX)。国教会聖職者 (特に高教会派) は、神学的に正統な立場の守護者として、反三位一体論を唱える人々を激しく批判した (Spurr 2006: 206)。こうした状況の中、当時の論争を背景に、ロックは『キリスト教の合理性』(1695 年) を執筆する。国教会聖職者ジョン・エドワーズは、『無神論の原因と契機に関する若干の考察』(1695 年) や『仮面を剥がれたソツツィーニ主義』(1696 年) の中で繰り返し同著作を批判し、ロックもそれに対して反論を試みる。

本報告では、エドワーズの著作を分析し、理性の範囲と信仰の対象をめぐる問題を中心に、エドワーズがソツツィーニ派を無神論と批判する際の議論とロックを批判する際の議論には違いがあること、そして、その違いから、ロックの議論 (聖書解釈) の特徴 (及び教義論争に踏み込まない理由) を示したい。

(福岡大学)

報告 2 : 空位期イングランド国教会における神定法・自然法概念

李 東宣

近年、イングランド国教会思想は、従来主流であった護教的関心からではなく歴史的視点から盛んに研究されている。しかしながら、君主政と国教会体制が無に帰した空位期に、国教会信徒がどのような思想を編み出したかという問いにはいまだ偏った答えしか与えられていない。

本報告は、イングランドの空位期(1649-1660)に、国教会信徒らによって交わされた近親相姦に関する議論を分析する。一見奇妙な主題が議論された背景と、その議論が拠り所とした権威を明らかにすることで、空位期における国教会信徒の神定法・自然法概念の探求に貢献する。

近親相姦という主題は、空位期国教会の守護者として名高いヘンリー・ハモンドが 1653 年に出版した『6 つの問いの解決にかかわる手紙』で最初に扱われる具体的な事案である。本書で表明されたハモンドの立場に対し、別の国教会信徒であるトマス・バーロウが反論を加えるが、両者の見解の違いはそれぞれの神定法および自然法概念の相違に起因するものであった。ハモンドはセルデンとトマスに、バーロウはグロティウスとスアレスに依拠しつつ自説を繰り広げた。

(東京大学大学院 総合文化研究科 博士後期課程)